劇場用ドキュメンタリー映画

「わたのまち」

企画書

これは、一つの街の未来を照らす熱き応援歌である

タイトル	「わたのまち」（仮題）
上映時間	1時間20分（想定）
完成時期	2024年12月～2025年2月（予定）
公開時期	2025年春（予定）
公開規模	東京・名古屋・大阪・豊橋・蒲郡 全国５都市～
出演者	蒲郡市民の皆さん
企画・プロデュース	土屋敏男　（Gontents）
監督・撮影・編集	岩間　玄　（ON THE SCENE）

概要

蒲郡市の繊維産業の歴史を紐解きながら、
現在及び未来の繊維業界を担う若者たちと
それを支え、励まし、背中を押す
蒲郡繊維界の個性豊かな匠・職人たち、
それぞれの情熱と葛藤と希望を描く
劇場公開ドキュメンタリー映画。

再生と復活への狼煙の物語。

これは、
一つの街の未来を照らす熱き応援歌である。

想定ストーリーイメージとコンセプト

畑一面に咲く木綿の花。
やがてそれが実を結び、固くなって爆ぜる。
中から雪のような真っ白い綿がフワフワと生まれてくる。

そこに重なるガチャンガチャンと機を織る音。
時代は一気に遡る。
朝から晩まで街のあちこちで
「ガチャン、ガチャン」と音が鳴り響いている。
1950年代の蒲郡市。
多くの織物工場が集まり、夜通し稼働するところもある。
「ガチャンガチャンって音がしないと、
逆に静かで不安で眠れないくらいだった」
そう語る人すらいる。

戦後、衣類が不足する中、
織れば飛ぶように売れた空前の好景気のことを
「ガチャ万景気」と呼ぶ。

織機をガチャンと動かせば万の金が儲かると言われた。
経営者らは夜な夜な温泉街の料亭へと繰り出した。
日本全国からモノと金と仕事を求めて人が押し寄せた。
街は情熱と活気に溢れ、人々は希望に燃えていた。
働き口はいくらでもあった。
東北や九州から「金の卵」とも呼ばれた
多くの少女たちが集団就職でこの街にやってきた。
経営者は、工場の脇に寮を建て、学校を作った。

経済と文化と教育が一緒に回っていた。
ガチャン、ガチャン、ガチャン。
それは人々が「今を生きる音」だった。

「ガチャ万景気」は形を変え、
名を変え、しばらく続いた。
しかし70年代以降、この活気は少しずつ失われていく。
信じられないほどの安価な海外生産品が出回り、
蒲郡の繊維産業は徐々に減速していく。
これは、蒲郡や繊維産業だけの問題ではなかった。
日本全国のモノづくり産業が大きな転換点を迎えていた。
モノづくりを誇りとしてきた各地方都市は、転換を迫られた。
ここ蒲郡もその宿命から逃れることは出来なかった。

ある者は工場を閉め、
ある者は業界を去り、
ある者は業態を変えた。

蒲郡の繊維工業は1989年から2019年までの30年間で
事業所数は6分の１、従業者数・出荷額は5分の１と激減している。
全体的に衰退していることは否めない。

ならば蒲郡の繊維産業は死を待つばかり、風前の灯なのか？

いや、決してそうではなかった。
現在でも蒲郡の主要産業はやはり繊維である。
ガチャ万景気の頃のように、とはいかないものの
多くの市民が繊維に関わる仕事をしている。
この土地には、繊維への愛と誇りが脈々と受け継がれている。
そこには長い歴史とロマンがあるからだ。

今から1200年前
日本に初めて綿花がもたらされたのがこの土地だったのだ。

西暦799年の「類聚国史」や「日本後記」によれば、
崑崙人（インド人）が愛知県幡豆郡福地村（現在の西尾市）に綿種を持って漂着した。
これが日本の綿の伝来と言われている。

江戸時代には三河地方で綿の栽培と綿織物が盛んとなり、
製品は「三白木綿」として江戸方面に送られ人気を博する。
さらに西洋の技術を取り入れ、
明治時代には「三河もめん」「三河縞」というブランド名で
全国に知れ渡るようになった。

「日本の繊維産業はこの土地から始まった」

その誇りが、蒲郡の人々の心の中に静かにある。
こうした静かな誇りがある限り、
どんなに減速・衰退しても
決して蒲郡市の繊維産業は死なない。

この街を舞台に、新たな繊維の物語が始まろうとしている。

三河エリアの繊維製品の工程は主に８つに分かれる。
「産元（コーディネーター）」「デザイン紋紙」
「撚糸」「先染」「整経」
「織り」「後染」「縫製」。

この８つの工程はそれぞれ異なる会社が担う。
元来、細分化された分業によって成り立ってきたこの業界は、
他社・他工程のことをあまり知らない。
それぞれが自分の工程を全うするので精一杯だったのだ。

しかし今、
それぞれの会社の若者たちが
何とか横の連携を図ろうとしている。
このままではいずれは消滅しかねない繊維業界を
次世代の自分たちが立て直そうと考えたのだ。

「俺たち私たちが今、やらなくていつ誰がやる」

彼らはまず素朴な疑問から始める。

「ところで故郷・蒲郡の名産品、
『三河もめん』ってそもそも何だ？」

この素朴な疑問を先人たちに尋ねても
何と返ってくる答えがまちまちなのだ。

ある人は「三河で作っているものなら何でも三河もめん」と言う。
ある人は「三河種の綿で作るものが三河もめん」と言う。
ある人は「多層重ねのガーゼが三河もめん」と言う。

定義が曖昧な、
しかし街の誇りでもある「三河もめん」。
まず「三河もめん」の正体を探ることころから彼らの挑戦は始まる。

そしてこの映画もそこからスタートする。
「あの〜その…三河もめんってのは何ですか？」

この素朴な問いの先には…
驚くべき街の歴史と
先人たちの知恵と工夫と
寡黙な職人たちの技と情熱、
そして強烈な個性が待っていたのだ。

これまで蒲郡の繊維業界に携わるベテラン職人たちは
あまり多くを語ってこなかった。
人に問われることも
誰かに教えを請われることもなかったからだ。
だが今、蒲郡の若者たちは知ろうとしていた。
繊維とは何なのか。
「三河もめん」とは何なのか。
そこにどんな秘密があるのか。
それをどう未来に継承していけるのか。いくべきなのか。

彼らは、2024年開催のファッションイベント
「東京ガールズコレクション」に一つの照準を据えた。
「ここで、自分たちが目指す新しい『三河もめん』を発表してみよう」
彼らはそう決めた。
しかしそれはそんなに簡単なことではなかった。

これまで横の連携を図ってこなかった業界が
会社や作業区分を超えて
集い、
語り、
迷い、
そして少しずつ手探りで前に進んでいく。
だが知識も技もない。
当惑、困惑、迷走、矛盾、混乱、遅延。

挑戦は自分たちだけでやれることではなかった。
だから彼らは先人たちの元を訪ねる。
教えを請いに。
知恵を授けてもらうために。
歴史を知るために。

これまで語ろうとしてこなかった
また語る機会もなかった職人たちが
「ならば…」と
静かに熱く口を開き始める。
己のこだわりと技について。
自分の心の中だけで静かに燃え盛る
繊維への愛と情熱について。

またこの映画のカメラも
彼らと同じように
「三河もめんって何ですか？」という
素朴な問いを携えて
各職人たちを愚直に訪ねて回る。

若者と、カメラの前には
恐ろしくユニークで風変わりで
愛すべき職人たちが次々と登場してくる。

綿の品種にこだわる職人。
糸の質にこだわる職人。
染めにこだわる職人。
織りにこだわる職人。
縫いにこだわる職人。
風合いにこだわる職人。

発展途上の若者たちと、
そして繊維について全く無知な監督が共に作る
この映画のカメラの前に、
一人また一人と登場してくる職人たち。

若き瑞々しい感性と、
職人たちの強烈な個性が出会う時、
そこに新しい物語が立ち上がってくる。
映画は、その物語のかすかな光をキャッチする。

これは、綿の街で展開する「繊維と人の物語」である。

彼らの試みと出会いを通して生まれる
「繊維と人の物語」を
カメラは丹念に丁寧に掬い上げ、
それを形にしていきます。

人は生まれた時は、誰もが裸です。
裸の赤子が初めて肌で触れるものが、
繊維で出来た衣です。
その繊維は通常は、
ポリエステルや絹や人工繊維ではなく、
綿製品です。
つまり人間が初めて
世界を知覚するその対象物が
綿（わた）であるということです。
綿（わた）は、
人間が初めて世界を知る
窓・入り口・扉なのです。

これは綿から始まる物語です。
そして綿が糸になり、生地になり、
人々の手に渡るまでの物語です。
そして、モノづくりが
世代から世代へと受け継がれていく物語です
そして、産業の再生と復活への狼煙の物語です。

この映画は、
一つの街の未来を照らす
熱き応援歌です。

付記

「モノを作る」という行為は、人間の生きる原点です。
この映画はそのことを見つめ直す機会でもあります。
そして魂を込めたモノを作り出すためには、
必ず“地盤”が必要となります。
その“地盤”とは、会社であり、組織であり、職場です。
こうした“地盤”をしっかりと確保し、守り、維持してきたのは
各々の繊維会社のタフな経営者たちです。

全盛期約2000社あった繊維会社は、現在わずかに30社。
残りの1970社、つまり全体の97%が消滅したことになります。

しかしわずか３%だけが何とか生き残りました。

生き残ったのには、生き残っただけの理由があるはずです。
その理由を、この映画は丁寧に探していきたいと思います。
経営者たちの生き残りをかけた苦悩と葛藤と一種の賭け、
そして決断と創意工夫と技術開発と労働環境の改革などにも
この映画は光を当てたいと考えています。

蒲郡という街で、どのようにしてモノづくりの“地盤”を守ったか。
サバイブするために何をどう考え、どう戦ってきたか。
生き残った経営者たちの熾火を、次世代にどう伝えていくべきなのか。
伝えていく先に、街と産業の未来が見えてきます。

この映画が、「モノづくり日本」が今彷徨う
先の見えない長いトンネルの出口の先にある、
小さな光のような存在になれば嬉しい。

作り手としてそのように願って、制作に着手したいと考えています。